

しば はら

芝原遺跡



- 1 所在地 南さつま市金峰町宮崎
- 2 起因事業 中小河川（万之瀬川）改修事業
- 3 調査年度（発掘調査）平成11～16年度
（整理作業）平成17～24年度
- 4 主な時代 縄文時代～近世
- 5 遺跡の概要

芝原遺跡は、万之瀬川中流の右岸、標高約4mの自然堤防上に位置し、縄文時代から近世までの遺構・遺物が発見されました。報告書は、今までに『芝原遺跡1 縄文時代遺構編』、『芝原遺跡2 縄文時代遺物編』、『芝原遺跡3 古代・中世・近世編』が刊行され、昨年度は、この事業の最後となる『芝原遺跡4 弥生・古墳編』を刊行しました。

6 注目される成果

(1) 縄文時代

縄文時代では、多くの土器・石器が出土しましたが、中でも県内でも珍しい中期の竪穴状遺構が発見され、その中から西北九州でよくみられる漁撈具の一種である黒曜石製の鋸齒尖頭器が見つかりました。棒の先端と側面に埋め込んで、獲物を突く「もり」として使用されたと考えられています。

(2) 弥生時代

弥生時代では、「小型仿製鏡」と呼ばれる日本製の鏡と中国製の鏡を分割した「破鏡」が4点発見されました。弥生時代の終わり頃のもので、祭祀に使用されたのではないかと考えられています。このような鏡の所有者は、この地域の支配者層の人々であったと思われます。

(3) 古墳時代

古墳時代では、完全な形に近い土器が集中して発見されました。水辺の祭祀を行った場所ではないかと考えられています。



古墳時代の土器集中

(4) 古代

古代では、今から約1,000年前の土師器に、墨で「酒井」・「福」・「宅」といった文字を書いた墨書土器やへらで書いたへら書き土器が200点以上発見されました。これほど多くの墨書土器やへら書き土器は珍しく、また、掘立柱建物跡も多く見つかることから、この地域を治める役所などが置かれていたのではないかと考えられています。また、多口瓶と呼ばれる須恵器の瓶や大型の壺なども見つかりました。

(5) 中世

中世では、大量の輸入陶磁器や国内産陶器が発見され、博多や坊津と並んで、この遺跡が万之瀬川下流域における海外貿易の拠点であったことがわかりました。中世末から近世にかけては、製鉄関連の遺構・遺物が発見され、鉄製品を生産する過程である製鉄→精錬→鍛冶のすべて工程がこの地域で行われていたことがわかりました。

